

ハーディとバラッドの伝統

— *The Mayor of Casterbridge* 考察 (2) —

近 藤 和 子

Abstract

One of the reasons why Thomas Hardy (1840-1928) was so isolated from his contemporary writers is that he was a great lover of ballads. *The Life of Thomas Hardy*, written by his second wife, shows how he was nurtured in a ballad-like atmosphere. Consequently ballad characteristics pervade much of his work. However, few criticism in the field has been published until now.

This paper is an attempt to fill in the void, researching on the novel *The Mayor of Casterbridge* (1886), one of his masterpieces. Since ballad characteristics depicted in the story itself were already proved in the present writer's former thesis, this paper focuses on thirteen such songs as traditional and broadside ballads, folk songs, ditties and psalm tunes quoted in the novel. Although most of their titles and narrative contents are not depicted, they were finally investigated through every possible means of the latest tools. Those songs are woven into the plot intentionally and help to mold the characters more completely into their circumstances. Moreover, some of them foreshadow later developments in the story.

It is also proved that Hardy's careful inclination of music provides a clue to comprehend the novel as well as a significant role in the formation of *The Mayor of Casterbridge*.

はじめに

19世紀から20世紀にかけて活躍したイギリスの詩人・小説家の Thomas Hardy (1840-1928) (以下、ハーディとする) の作品の多くには、他作家に

は見られない顕著な特徴がいくつかある。その中の一つに、作品内に音や歌が絶えず微かにまた大きく響き渡っていることが挙げられる。そのルーツは、彼が幼少の頃から音楽的環境に恵まれて育ったことにあり、Florence Emily Hardy (1879-1937) は *The Life of Thomas Hardy*¹『ハーディ伝』の中で、その詳細な記述をしている。彼の生まれ故郷、イギリス南部の Dorset 地方には、当時まだ中世の佇まいが色濃く残されていて、「村人たちは、“ballad”（以下、伝承とブロードサイドを含めて「バラッド」とする）を歌い、迷信や魔術などを信じるフォークロアの世界に生きていた。」(Hardy, F. E. 20) 消えゆく運命にあったバラッドを含むフォークロアへの彼の愛着について、筆者は今日まで拙論を通して述べてきたので、本稿での重複は避ける。

ハーディ家の人々は代々、音楽を愛し、地元の教会の聖歌隊の音楽活動に加わって、バイオリン、チェロ、オルガンなどの伴奏を担当して貢献した。幼少の頃のハーディと音楽との出会いは次のように記されている。「彼はまだ歩けないうちから文字が読め、幼い頃からバイオリンの調弦ができた。生来夢中になりやすい気質で、音楽には異常なほど敏感であった。父親が演奏するジグ、ホーンパイプ踊り、リール、ワルツ、カントリー・ダンスなどのメロディを聞きながら、幼かったハーディは部屋の中央で一人で踊りながら感動して涙を流したほど感受性の強い子供であった。その中の一曲に“Miss Macleod of Ayr”（古いスコットランドの名曲でバーンズも踊ったかもしれない）があった。父親の指導のもと、4歳の頃には譜面を見てすぐにその曲が弾けた」(Hardy, F. E. 15) と記述されている。“Miss Macleod of Ayr” は、本稿で取りあげるハーディの長編小説の代表作の一つ、*The Life and Death of the Mayor of Casterbridge*（以下、*The Mayor* とする）の中で引用されている。作品の中で、主人公 Henchard の宿敵 Farfrae とその恋人 Elizabeth-Jane が、このリール曲に合わせてペアで踊る場面があるが (ch. 16)、この例が示すように「ハーディは技術的には優れた演奏家

ではなかったが、メロディに対する感受性と記憶力は人一倍強く、音楽は常に身近な存在であった。」(Hardy, F. E. 16) (下線は筆者)

ハーディの故郷 Dorchester には “Dorset County Museum” があり、館内には “Hardy Memorial Room” が設置されている。これは生前のハーディの書斎をそのまま再現・展示したもので、彼が愛用していたバイオリンやチェロが机や書棚の前に置かれていて、来館者の眼を引く。彼が生涯を通して音楽を愛し、音楽が常に身近な存在であったことを示す証しでもある。しかし彼がバラッドや Dorset 州の “folk song” の蒐集家であり、その存続に貢献したことは研究者の間でもあまり知られていない。

I

The Mayor のストーリーそのものに内在するバラッドの受容とハーディ独自のバラッド観については、『ハーディとバラッドの伝統 — *The Mayor of Casterbridge* 考察 (1) —』² で論考済みである。従って本稿では、*The Mayor* の中で実際に引用・挿入されている全てのバラッドやフォークソングなどを拾い出して、それらの歌詞の内容やメロディが登場人物の心理、状況、プロット、ストーリーの展開にどのような影響を及ぼしているのかを分析する。

作品内で取り上げられているバラッドやその他の歌には、そのタイトルのみが記されたもの、タイトルの記述はなく歌詞の一部のみが記されたもの、登場人物の会話の中で歌詞の内容について言及されているもの、さらに出典箇所が明示された讃美歌などがある。限定された記述のみから、引用・挿入されている全ての歌の全容を解明するために、筆者はそれらの資料を探し出した³。第1章から順に列記すると次のようになり、本稿のⅡ章とⅢ章で、これらの歌をストーリーの進行に合わせて考察してみたい。

① “Sicilian Mariners’ Hymn”

(title のみ ch. 4)

- ② “The Roast Beef of Old England” (title のみ ch. 5)
- ③ “It’s hame, and it’s hame, hame fain would I be,
Oh hame, hame, hame to my ain countree!
There’s an eye that ever weeps, and a fair face will be fain,
As I pass through Annan Water with my bonnie bands again;
When the flower is in the bud, and the leaf upon the tree,
The lark shall sing me hame to my ain countree!”
(title なし ch. 8)
- ④ “O Nannie” (title のみ ch. 8)
- ⑤ “Auld Lang Syne” (title のみ ch. 8)
- ⑥ “As I came in my bower door,
As day was waxin’ wearie,
Oh wha came tripping down the stair
But bonnie Peg my dearie.”
(title なし ch. 8)
- ⑦ “As I came down through Cannobie” (1 行のみ ch. 14)
- ⑧ “Miss Macleod of Ayr” (title のみ ch. 16)
- ⑨ “‘Twa-s on a s-m-r aftern-n,
A wee be-re the s-n w-nt d-n,
When Kitty wi’ a brow n-w g-wn
C-me ow’re the h-lls to Gowrie.”
(title なし ch. 24)
- ⑩ “Psalm the Fourth” (歌詞なし ch. 33)
- ⑪ “Psalm the Hundred-and-Ninth”
“His seed shall orphans be, his wife
A widow plunged in grief;
His vagrant children beg their bread
Where none can give relief.

“His ill-got riches shall be made
To usurers a prey;
The fruit of all his toil shall be
By strangers borne away.

“None shall be found that to his wants

Their mercy will extend,
Or to his helpless orphan seed
The least assistance lend.

“A swift destruction soon shall seize
On his unhappy race;
And the next age his hated name
Shall utterly deface.” (ch. 33)

⑫ “...that funny song about high-heeled shoon and siller tags,
and the one-and-forty wooers.” (Lucetta’s phrase ch. 34)

⑬ ““And here’s a hand, my trusty fiere,／And gie’s a hand o’ thine.”
(title なし ch. 38)

II

本作品は全45章で、序章と6局面から構成されている。物語の舞台 Casterbridge は、イギリス南部の Dorset 州にある実在の町 Dorchester がモデルとなっている。粗筋は次の通りである。主人公 Michael Henchard は一介の干草刈りで、物語の冒頭で事件を起こす。Casterbridge の町外れ Weydon-Priors の市で、酒の勢いを借りたとは言え、妻を競売にかけ、行きずりの水夫に売り飛ばした。その直後、彼は自責の念にかられて21年間の禁酒を誓う。そして18年の空白の後、突然再登場した彼は、Casterbridge の町長になっていた。しかし、激情的な性格と連続して起きる事件や事態は彼を翻弄し続ける。彼を取り巻く主要な人物たちは、妻 Susan Henchard、娘（実際は義理の娘）Elizabeth-Jane、Scotland から来た若者 Donald Farfrae、水夫 Richard Newson、そして Henchard の愛人 Lucetta Templeman の5人である。彼らの登場、または再登場によって、事件と状況が目まぐるしく展開して行くが、それらに適切な対応が取れなかった Henchard は、最終的に元の干草刈りに逆戻りして荒野で自ら死を選ぶ、という悲劇的なストーリーとなっている。

夕闇せまる Weydon-Priors を、みすぼらしい恰好をした Henchard と妻 Susan は、沈黙したまま歩いていた。夫は一枚の “ballad-sheet” を読んでいて、妻は時おり小声で背中の赤子をあやしていた。そのとき静寂^{しじま}を破って聞こえてきたのは、一羽の小鳥のか弱い鳴き声だったが、Henchard は気にも留めなかった。この小鳥のイメージは物語の終盤に出てくる鳥籠に入れられた一羽のヒワへと繋がる。この小さな鳴き声に始まって、大小さまざまな音や音楽が Casterbridge の町に響いてゆく。

妻の競売事件から18年の歳月が流れ、Susan と Elizabeth-Jane が突然 Casterbridge の町に現れる。二人の耳に真っ先に飛び込んできたのは、町長となっていた Henchard が “King’s Arms Hotel” 「キングズ・アームズホテル」で催す晩餐会を盛り上げる楽隊の響きであった。「やがて晩鐘の “Sicilian Mariners’ Hymn” 『シチリアの水夫の讃美歌』（I 章、①）のメロディが口ごもるように聞こえてきた。」(ch. 4) この讃美歌は、シチリアの船員たちが一日の終わりに神の加護を願って斉唱したもので、イタリアからドイツ、英国へと伝播したが、時の流れと共に消えつつある。この讃美歌は6行7節で構成され、各節の後半3行は、バラッドの chorus (refrain) に相当する。第2節は次のようになっている。

Pass me not, O God, my Father,
 Sinful though my heart may be;
 Thou mightst leave me, but the rather,
 Let thy mercy light on me;
 Even me, even me,
 Let thy mercy light on me. (st. 2)

2行目の “Sinful though my heart may be” のフレーズは、妻の競売事件の張本人で罪を犯した Henchard の心の傷をさらに疼かせた。

空腹を抱えた母娘^{おやこ}は、「自然と音楽の鳴り響く方へと足を向けた。」(ch. 4)

その調べは、町の楽団が演奏していた“The Roast Beef of Old England”「なつかしいイギリスのロースト・ビーフ」であった。イギリス人が好むこのバラッドは、Henry Fielding の代表作 *The Grub-Street Opera*『三文文士街のオペラ』（1731）3幕3場の中で歌われるもので、彼が作詞した“broadside ballad”⁴に Richard Leveridge が曲をつけて人気が出始め、オペラ上演の前後に劇場の観客が歌ってその場の雰囲気盛り上げた。“The Roast Beef of Old England”は5行7節で構成され、各節後半の2行は chorus (refrain) である。第1節は次のようになっている。

When Mighty Roast-Beef was the Englishman's food,
 It ennobled our brains and enriches our blood.
 Our soldiers were brave and our courtiers were good.
 Oh! The Roast Beef of old England,
 And old English Roast Beef! (st. 1)

長旅の疲れと空腹にもかかわらず、2個のパンしか買えなかった二人の耳に、ロースト・ビーフに纏^{まつ}わる歌は酷であったが、この歌はユーモラスな内容のバラッドとなっている。

二人はようやく“The Three Mariners”「三人の水夫館」という名の中流宿に滞在することに決めた。そこには Henchard の生涯の宿敵となる Scotland 人の Farfrae も同宿していた。この宿は、客と一緒に町の中流階級の人々も飲んで歌う寛ぎの場ともなっている。Elizabeth-Jane は宿泊代を浮かすために宿の手伝いをしていたが、「ある歌の出だしの文句が魅力ある歌い口で彼女の耳に入ってきた。」(ch. 8) この歌のタイトルの記述はないが、6行ほどが引用されている。(③) この個所は、“Jacobite song”（亡命した英国王 James II の支持者たちの歌）から引用されているが、様々な version があり、Scottish ballads に精通していた Scotland の詩人 Allan Cunningham (1784-1842) による version が定着していて、タイトルは

“Hame, Hame, Hame”である。最初の2行“Hame, hame, hame, O hame fain wud I be, / O hame, hame, hame, to my ain countree!”（故郷よ 故郷よ 思いはいつもはるかな故郷に / ああ 故郷 故郷 わが故郷の家よ）が、バラッドの chorus (refrain) として繰り返され、歌う者 (song-leader) と唱和する者 (audience, chorus) の望郷の念を掻き立てる。遠い Scotland からのはるばる England の南の町までやって来た Farfrae が、異郷の地で過ごす寂しさから望郷の念にかられて歌ったもので、彼の心境を余すところなく表現している。同時に彼の歌のうまさは、そこに居合わせた人々を驚かせ、彼らは“Come, ... let the young man draw onward with his ballet [ballad]”と言ってバラッドをもっと続けて歌うように Farfrae に促した。彼らの要望に答えて Farfrae は、「見事な抑揚で“O Nannie” (④) を歌い、さらに同じような調子の歌を1、2曲続けた後で“Auld Lang Syne” (⑤) を歌った。」(ch. 8)

先ず“O Nannie”は、タイトルだけが記されているが、Thomas Percy (1729-1811) の *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) の Preface にその簡単な説明がある⁵。それによると、伝承されてきた英語版に Percy が Scotland 方言を交えて書き直し、*Johnson's Musical Magazine* (1773) に掲載したが、この Scottish version はしばしばリプリントされた。Robert Burns (1757-96) が英語版に改作したものもあるが、ハーディは、あえて Scottish version を Farfrae に歌わせて、彼が Scotland 出身であることを強調している⁶。

“O Nannie, wilt [will] thou [you] gang [go] wi' me,
 Nor sigh to leave the flaunting town,
 Can silent glens have charms for thee,
 The lowly cot, the russet gown?
 Nae langer [No longer] drest in silken sheen,
 Nae langer deckt wi' jewels rare,

Say, canst thou quit each courtly scene,
 Where thou wert fairest of the fair?"
 Where thou wert fairest,
 Where thou wert fairest,
 Where thou wert fairest of the fair. (st. 1)

11行（うち3行は refrain）4節で構成されたこのバラッドの正確なタイトルは、1行目のように“O Nannie”の後に“Wilt Thou Gang Wi’ Me?”が付き、「ナニーよ 僕と一緒に来てくれるかい？」である。この直截簡明なタイトルが示すように、若者がナニーに問いかける形で話は進む。君は社交界の華やかな生活を捨てて、地味な田舎暮らしの僕を愛しながら一緒に暮らすには苦労もあるが、耐えてくれるだろうか。僕の最期を看取った後、その墓前で、華やかな生活を捨てたことを後悔するとは言わないだろうね、と念を押して終わっている。*The Mayor*の中でFarfraeが、LucettaとElizabeth-Janeそれぞれと、どのように恋を成就させてゆくのか、この歌はその伏線となっている。

続いて歌われた“Auld Lang Syne”⁷もタイトルだけしか記されていない。この歌は、日本では「蛍の光」として定着している衆知のものである。世界的にも有名かつポピュラーな Scotland 民謡で、*Concise Scots Dictionary*によると“Auld”は“old”、“Lang”は“long”、“Syne”は“ago, since, before now, thereafter”を意味し、全体では“the years long ago”または“memories of the past”である。研究者の間では、この歌の原曲は Scotland の国民的詩人 Burns が伝承されていた古謡をもとに改作したものである、と推定されている。8行（うち4行は refrain）5節で構成され、この歌詞全体の内容は次の通りである。子供のころ野山で友だちと遊んだ日々をどうして忘れることなどできようか。互いに成長して幼なじみ同士が再会した時には手を取り合って、楽しかった遠い昔の日々のために乾杯しよう、となっている。スロー・テンポなメロディで次のように始まる。

Should auld acquaintance be forgot,
 And never brought to mind?
 Should auld acquaintance be forgot,
 And auld lang syne!
 For auld lang syne, my jo [dear],
 For auld lang syne,
 We'll tak [take] a cup o' kindness yet,
 For auld lang syne. (st. 1)

後半の4行を聴き手が chorus (refrain) として唱和し、歌い手との友情が続いてゆく喜びを心から願う気持ちが上手く表現されている。Farfrae が歌った“O Nannie”と“Auld Lang Syne”は、宿の客や居合わせた人たちの心に響き、「彼らの誰もが心の奥で感じていたが、それまで上手く表現できなかったものを Farfrae がはっきりと明言した最初の人であった」と説明されている。彼はバラッドの故郷 Scotland 出身で、音楽の達人と紹介され、その歌はその場に居合わせた、狭い地域に閉じ込められた人々の心を代弁するかのようであった。作品内で“Farfrae”で意味が通じる場合でも、ハーディは繰り返して「Scotland 人の」と形容句をその頭に付けているが、これはバラッドの故郷である Scotland への彼の郷愁に起因すると考えられる。

この場面をきっかけに、Farfrae はイギリス南部の町の人々に好意的に受け入れられ始め、その後も身辺状況が変化する度に彼らを味方につけてゆく。Elizabeth-Jane も同様に彼に好意を抱くようになる。宿の階段で二人がぎこちなくすれ違った時、Farfrae は「もう容易に止められそうもない歌の翼に乗って“an old ditty”を歌いだした。」(⑥) この古い小唄のタイトルの表示はないが、調べてみると Burns の“Bonnie Peg”からの引用であることが判明した⁸。括弧内の語は Burns の元歌の用語を示し、左の4行はハーディによって部分的に変更されたものである。

“As I came in my bower door, (our gate end)

<u>As</u> day was waxin' <u>wearie</u> ,	(When, weary)
<u>Oh</u> wha came tripping down the <u>stair</u>	(O, street)
But <u>bonnie</u> Peg my dearie."	(Bonnie, !)
	(下線は筆者)

1行目の「木戸の端」が「あずま屋の戸」に、3行目の「通り」が「階段」に変更され、Farfrae と Elizabeth-Jane の置かれた状況がより具体的に表現されていて読者には分かり易い。4行3節で構成されるこの小唄の続きは、Peg の美しさを褒めたたえ、最後は “And, Oh! That hour and broomy bower, / Can I forget it ever?” (エニシダの茂るあずま屋でのひと時を / 忘れることなどできようか?) と締めくくられている。Elizabeth-Jane は慌てて恥じらいを隠したものの、「部屋に戻ってもその歌をハミングしていた」のである。この Farfrae の歌は彼女に淡い恋心を抱かせ始めたのみならず、宿の窓の外でその歌声を聞いていた Henchard をも魅了し、彼は “To be sure, to be sure, how that fellow does draw me!” (確かに、確かに、あいつは俺を引きつける) とつぶやいた。これが契機となり、彼の言動は激しさを増してゆく。Farfrae の望郷の念、Elizabeth-Jane との恋の始まりの予感、そして小麦商としての Henchard が以後 Farfrae と商売仇となってゆくことを示唆して余りある歌の挿入である。この第8章で歌われる曲は、他の章のものとは比較にならないほど詳細である。またその数も4曲と多いのは、ハーディのバラッドやフォークソングへの傾倒を示すと同時に、それぞれの歌詞は登場人物たちの心理状況をも明らかにしている。

ある時、小さな事件が起きる。それは Susan の我が娘を思う心に端を発していた。彼女は娘 Elizabeth-Jane と Farfrae の仲を近づけようと、二人が納屋で偶然出会うような計画を内密で立てて、実行に移したのである。若い二人は顔を合わせたものの間が持てず、彼女は彼に話しかける。『三人の水夫館』であなたが歌った “Bonnie Peg” (⑥) から分かりますが、あなたは故郷に帰りたいのではないですか?」と聞くが、彼は否定する。彼女は

そのまま去って行くが、その後ろ姿を眺めながら Farfrae は、自然に口笛で “Bonnie Peg” の 1 フレーズ “As I came down through Cannobie” (⑦)⁹ を吹いた。Casterbridge の地で Elizabeth-Jane に出会えた喜びを隠しきれなかった Farfrae の様子がここに表現されている。(ch. 14)

時は流れ、国家的行事を祝うために Casterbridge で催し物をする事になり、Henchard と Farfrae がそれぞれの出し物を競う。しかし天候の急変で杜撰^{ずさん}な作りの Henchard のテントは、その網を通る風が「アイオリスの堅琴のような即興曲を奏で」、雨漏りがして村人は集まらず、失敗に終わった。一方、Farfrae の立木を利用したテントの囲いからは、楽しそうな「弦楽器の団が奏でる調べが聞こえた。」辺境の Scotland 高地人の衣裳をまとった Farfrae は、故郷の軽快なダンス (reel) の相手に Elizabeth-Jane を選んだ。テンポの速い “Miss Macleod of Ayr” (⑧) を踊りながら、「故郷で人気がある舞踊曲だよ」と囁く。この曲は前述した通りであるが¹⁰、幼少期に聞いたバラッドやフォークソングに加え、ダンス曲のメロディや歌詞もハーディには確かな記憶として脳裏に焼きついていたのである。これらの記憶が彼の詩や小説の中にしばしば挿入されているが、この「エアのマクロイドのお嬢さん」も例外ではない。この曲名には伝承歌の常として、地名や人名に変化がみられる。“Ayr” が “Raasay”、“Macleod” が “M’Leod”、また曲名が “Miss McLaud’s Reel” や “Mrs. McCloud’s Reel” に変化した version もある。ちなみに “Ayr” は、Scotland の Glasgow の南西に位置する港町で、Burns Country の中心地でもある¹¹。村人たちに出し物の無策を嘲笑された Henchard は、逆に成功した Farfrae に嫉妬し、衝動的に彼に解雇を言い渡す。これを境に二人は商売仇同士としてさらに対峙し、仕事上の立場は逆転し始め、事態は急展開してゆく。“Miss Macleod of Ayr” のリール曲特有の速いテンポが、両者の立場が急変するのを象徴している。

III

下降線を辿り始めた Henchard の前に、彼の昔の愛人 Lucetta が突然、現れる。しかし彼女は偶然出会った Farfrae の「ピンと張られた弦楽器に似た、北方人特有のきびきびした態度や厳格さ」に魅了されて Henchard をあっさりと捨てる。やがて Casterbridge にも新しい種蒔機が持ち込まれ、その機械の中から Farfrae のゆったりした鼻歌が聞こえてきた。(9)

(ch. 24)

“Tw-s on a s-m-r aftern-n,
A wee be-re the s-n w-nt d-n,
When Kitty wi’ a braw n-w g-wn
C-me ow’re the h-lls to Gowrie.”

この歌もタイトルの記述はないが、Lady Caroline Nairne (1766-1845) 作詞の broadside ballad, “The Lass of Gowrie” 「ガウリーの娘」からの引用である¹²。8行4節 (refrain なし) で構成されているが、上記の鼻歌を続く4行も足して元の歌詞に直すと次のようになる。

’Twas on a simmer’s [summer’s] afternoon,
A wee afore [A little before] the sun gaed [go] doun [down],
A lassie wi’ a braw [splendid] new gown [gown]
Cam’ owre [over] the hills to Gowrie.
The rose-bud wash’d in simmer’s shower,
Bloom’d fresh within the sunny bower,
But Kitty was the fairest flower
That e’er [ever] was seen in Gowrie. (st. 1)

London にある “Vaughan Williams Memorial Library” 所蔵の archive collection には2種類の version が掲載されていて、1つは3節、もう1つ

は5節で構成されているが、ストーリーは大体同じで次のようになっている。Gowrie の地主の息子（無名）が娘（Kitty）に恋をする。彼には広大な土地と立派な邸宅があるが、彼女が Gowrie に来てくれるかどうか不安である。娘は求愛されても家族のことが心配で悩むが、遂に涙ながらに彼の求婚を受け入れる。そして “But now she’s Leddy Gowrie.”（今ではガウリー夫人です）、と締め括られている。このように実に単純明快なストーリーで、通常の broadside ballad に見られるような道徳的説教や人生の教訓的なものは全く語られていない。この “broadside sheet” の挿絵には、ジェントリー風の紳士と “braw new gown”（立派な仕立ておろしのガウン）を着た娘が、木の傍で手を取り合っている様子が描かれている。*The Mayor* に話を戻すと、Farfrae はこの時すでに、地味な風情の Elizabeth-Jane より「もっと明るく派手なガウン」を着た Lucetta に魅かれ始めていた。そして Lucetta も Farfrae の微妙な恋心の変化を見抜いていた。こうして二人の仲は急速に深まって行くが、ハーディは近い将来の二人の結婚を暗示する内容のバラッドをここで Farfrae に歌わせているのである。

やがて Henchard の21年の禁酒期間が終了する。その日はちょうど日曜日で、教会帰りの村人たちが「三人の水夫館」にやってきた。彼らの後ろにはいつもコントラバス、バイオリン、フルートなどを抱えた聖歌隊がついて来た。Henchard は彼らに、“Hymns, ballets [ballads], or rantipole rubbish; the Rogue’s March or the cherubim’s warble....” (ch. 33)（讃美歌でもバラッドでもくだらんやつでも何でも良い）と一曲、要望した。21年間の憂さを酒を飲み、歌を聞いて晴らそうとしたのである。常連客の一人が『旧約聖書』の「詩篇第4章」（⑩）を提案したが、Henchard は嫌がった。作品に引用はないが、特に2節目の “How long will you people turn my glory into shame? / How long will you love delusions and seek false gods?”（人の子らよ いつまで私の名誉を辱めにさらすのか / 空しさを愛し 偽りを求めるのか）という David（ダビデ：

第2代イスラエル王)の言葉は耳にしたくなかったのである。選曲で揉めた末に、歌うのは「詩篇第109章」に決まり、Henchardが10節から15節を読む。

(⑪)¹³この中の12節(正しくは11節)は“The fruit of all his toil shall be / By strangers borne away.”(彼のものは一切奪われ / 働きの実は他国人に略奪されるように)となっていて、Farfraeに全てを奪われたHenchardには苦々しい思いが再び蘇った内容の文言である。やがて楽器が鳴りだし、神罰を乞う詩が歌われた。ちょうどその時、「三人の水夫館」の前を通りかかった新婚のFarfraeとLucettaを目撃したHenchardは、「あいつの歌のせいで、俺は放りだされた」、と憎悪を募らせる。彼は最後のフレーズ“And the next age his hated name / Shall utterly deface!”(その憎むべき名を / 次の代に消し給え)を口ずさみながら、その場を後にする。8節の“Let his life be cut short, / and let someone else take over his work.”(彼の生涯は短くされ / 地位は他人に取り上げられよ)は、作品では省略されているが、この個所こそHenchardの置かれた状況と合致し、その通りに彼は町長の座もFarfraeに奪われてしまった。(ch. 33)

ところがFarfraeは、落ちぶれたHenchardに仕事を提供しようと援助の手を差し伸べる。今の地位を含めて生活の基盤を固めてくれたHenchardに恩義を感じたからであるが、頑なHenchardには逆に敵意が増す。さらに新婚のFarfraeとLucettaの幸せそうな様子にHenchardの嫉妬は深まるばかりである。彼女はHenchardとの過去の関係を夫のFarfraeには告げていないので、秘かにHenchardの嫉妬を危惧するが、そのことを夫には言えない。一方、FarfraeはHenchardの敵意に不安を隠せないが、その様子を察したLucettaは、夫に次のように言う。“Now when we have finished tea, sing me that funny song about high-heeled shoon and siller tags, and the one-and-forty wooers.”(⑫)(さあ、お茶がすんだら、銀の飾りの付いた踵の高い靴と41人の求婚者たちの、あの変な歌を歌ってちょうだい。)しかし彼は、「とても歌えそうにない。あの人は商売仇というより

は古風な恋敵のようだ」と答える。それを聞いた妻は、Henchard との昔の
 関係が露頭するのではないかと恐れて青ざめる。Lucetta の文言だけが記さ
 れたこの歌の出典は、“Tibbie Fowler o’ the Glen”「谷間のティビー・ファ
 ウラー」であることが判明した¹⁴。この歌は8行（うち4行が refrain）6節
 で構成されている。内容は、ヒロインの Tibbie は両親の死後その遺産を受
 け継いで金持ちになるが、それを目当てに大勢の男たちが競って彼女に言い
 寄って来る、となっている。第3節の1行目は、“There’s seven but[outside],
 and seven ben [inside]” とスコットランド語が混じって始まるが、この
 行は “There’s seven outside the house, and seven in the parlour”
 の意味である。この節の4行目は、“There’s ane [one] and forty wooin’
 at her.” となっていて、総勢41人もの男たちが彼女に求婚する、と大袈裟
 に歌われている。（誇張した文言や表現はバラッドの特徴である。）上記の第
 3節の4行目と下記の第4節の3行目と4行目が Lucetta が言及している
 個所であるが、後半の refrain 4行も付けて記す。

She’s got pendles in her lugs [jewels in her ears],
 Cockle-shells wad [will] set her better,
 High-heel’d shoon [shoes] and siller tags [silver straps],
 And a’ the lads are wooin’ at her.
 Wooin’ at her, pu’in [pulling] at her,
 Courtin’ at her, canna [cannot] get her:
 Filthy elf, it’s for her pelf [money],
 That a’ the lads are wooin’ at her. (st. 4)

Lucetta は、自分の豪華な身なりや財産目当てに男たちが言い寄ってくる、
 と吹聴するが、皮肉なことに Farfrae も Henchard も財産などには興味が
 なかった。Lucetta の文言から検索できたこのバラッドの内容は、前述の概
 略から想像されるように、彼女の派手な金銭感覚や男性に対しての道德観を
 暗示するものとなっている。

やがて Farfrae の町長就任を祝うために、「Casterbridge の町の鐘が大きく鳴り響き、金管楽器や木管楽器、弦楽器や太鼓などから成る楽団がいつもより賑やかに町を練り歩いた。それは Tamerlane's trumpet¹⁵ のように鳴り響き」、落ちぶれた Henchard をこの上なく苛んだ。(ch. 34) さらに彼に追い打ちをかける 2 つの事件が前後して発生する。1 件目は王室の要人が Casterbridge に立ち寄った際に、無礼な振る舞いをした Henchard を町長の Farfrae が見物客の面前で阻止したこと。もう 1 件は、町長夫人に納まって派手な振る舞いをする Lucetta への町の人々の不満が水面下で不気味にうごめ蠢き始めていたことである。1 件目の事件の腹いせに Farfrae との決闘を決めた Henchard は、納屋で相手を待ち構える。その時 Farfrae が鼻歌を歌いながら入って来た。“‘And here’s a hand, my trusty fiere [companion], / And gie’s [give me] a hand o’ thine [of you]’”¹⁶ (⑬) (手を取り合おう 親愛なる友よ / さあ 君の手を) この歌は彼が「三人の水夫館」に初めて来た時に歌っていたバラッドで、Henchard も耳にしていた。しかし “Nothing moved Henchard like an old melody.” (ch. 38) (懐かしい歌ほど Henchard の心を動かすものはなかった) と説明されるように、その歌を思い出して彼の闘争心は削がれてしまった。がっしりした体格の Henchard は、華奢な体つきの Farfrae に対して自ら片腕を縛り、ハンディキャップをつけて対等な状態で待ち伏せしていたが、最早 Farfrae は “trusty fiere” (真の仲間) ではなく、“a hand o’ thine” (君の手) など取りたくもない憎悪が増すばかりの相手に、その鼻歌は皮肉な響きにしか聞こえなかった。ここでもハーディの的確な歌詞の引用・挿入が光る。

“Now he’ll (Farfrae will) hate me (Henchard) and despise me for ever.” (やつは俺を憎み、永遠に軽蔑するだろう) と嘆く Henchard に、町の方からいつもの楽団のものとは異なる耳慣れない律動的な音が聞こえてきた。(ch. 39) それは不義を犯した男女に似せた人形ひとがたを馬に乗せて囃したてる “skimmington”¹⁷ (お馬なぶり) の騒々しい音で、Lucetta も別の場

所でそれに気がついた。赤い服を着せられた自分の人形ひとがたを見て驚いた Lucetta は気絶し、それが原因で流産し、やがて息を引き取る。村人たちが実行したこの悪習は彼女の死を誘発し、プロットの展開に果たした役割は Henchard にも大きく関係してくる。妻 Susan とかつての愛人 Lucetta を亡くし、Farfrae にも疎んじられた彼は、最後の望みを Elizabeth-Jane に託した。しかし彼女を探していた実父 Newson が20年ぶりに現れて、彼女も Henchard から離れてゆく。失意の中を Henchard が向かった先は、「十の水門」と呼ばれる川の淵で、そこを死の床にするつもりであった。しかし、自分に似せた人形ひとがたが死人のように流れてくるのを目撃し、その無残な姿さまに自分の死体が想像されて自殺を思い止まり、その場を去る。“Skimmington” で使われた残骸は、Henchard の近づいて来る最期までに、短いとは言え、彼に時間的猶予を与えたのである。(ch. 41)

一方、Farfrae と Elizabeth-Jane の仲は徐々に深まり、散歩の途中で彼は次のように話しかける。“(with the pathos of one of his native ballads). — ‘Ah, I doubt there will be any good in secrets! A secret cast a deep shadow over my life. And well you know what it was.’” (ch. 42) 物事を秘密にして良いことがあるとは思えないし、自分が亡妻 Lucetta の秘密を知らないまま彼女と結婚したことが心の翳りとなっているのを君は知っている筈だよ、と Elizabeth-Jane に同意を求める。この彼の言葉の前に唐突に付けられた、「故郷のバラッドがもつ哀感をこめて」の説明に読者は違和感を覚えるであろう。しかし、このシーンはバラッドの故郷 Scotland への望郷の念を抱く Farfrae の思いを強調し、さらには、ハーディのバラッドへの郷愁がふと脳裏を過ぎよったことによる言及ではないだろうか。

間もなく、Casterbridge の町に Farfrae と Elizabeth-Jane の結婚を知らせる鐘が優しく鳴り響く。楽団の演奏に交じって Farfrae の “song of his dear native country” (懐かしい故郷の歌) も屋敷から漏れ聞こえてきたが、

この歌は “Hame, Hame, Hame” (③) を指すであろう。干草刈りに逆戻りしていた Henchard は、義理の娘へのせめてもの結婚祝いに鳥籠に入った一羽の “goldfinch” (ヒワ)¹⁸を買った。しかし手渡すことなく屋敷の庭の隅に置き去りにされたこの鳥は、Farfrae 夫人となった Elizabeth-Jane に発見された時には、すでに餓死していた。この “the starved little singer” は、近づく Henchard の死を象徴する。全てを失った末に、彼は Egdon の荒野で死と向き合い、方言混じりの遺言¹⁹を書く。これはバラッドの臨終口頭遺言を想起させるとともに、自分自身への挽歌ともなっている。(ch. 45) 遺言には「Elizabeth-Jane に自分の死を知らせるな、こんな自分のために悲しませるな」と書いてあったが、駆けつけた彼女は涙にむせぶ。Henchard の最期を看取ったのは、かつての使用人 Abel Whittle 一人であった。Henchard は生前 Whittle の母親に親切にしたことがあったが、そのことに感謝する彼の^{とつとつ}訥々とした言葉は、“the sublime tragic simplicity of Whittle’s elegy on Henchard” (Brooks 214) (イタリック体は筆者) となって静かに荒野を流れていった。

結び

ハーディは「音」や「音楽」に対する豊かな感受性に恵まれていた。さらに民衆の歌であるバラッドやフォークソングなどの蒐集に情熱を注ぎ、楽器の演奏も楽しんだことは本稿の「はじめに」で書いた通りである。自然界の音に耳を傾けたり、他者と共に音楽を楽しむことは頑な Henchard には出来なかった。ハーディの描く人物たちは音楽を愛好するか否かで、その人生に大きな差がついている。音楽が人に与える恩恵を無視し、異常な言動をとり続けてきた Henchard は、結局、孤独な悲しい最期を迎える他なかったのである。

The Mayor には、小鳥の鳴き声、せせらぎの音、聖歌隊の歌や伴奏、バンドの演奏、さらに鳴り物入りの騒々しい囃しまで、実に多様な音が響いて

いる。それらの音の間に、traditional ballads, broadside ballads, folk songs, ditties, hymns などが挿入されて歌われている。これらはタイトルか、またはその歌詞の一部しか記されていないが、筆者は全ての歌詞の資料を探し出して、それらの内容を確認した。その結果、今日までハーディ文学の研究対象の一つとされてこなかった、作品内の挿入歌が果たしている役割が浮かび上がった。すなわち、これらの歌は登場人物の心理状態を暗示しながら人物像をより明確に補強し、プロットの網目に深く入り込み、各場面の状況設定に関与しながら、その展開を前面に押し進めてストーリーと密接な関係を保っていることが判明した。

バラッドやフォークソングのタイトルのみか、またはそれらの歌詞の一部に限定された挿入歌の役割の重要性は、*The Mayor*に限ったことではなく、ハーディの他作品についても同様に例証できる。しかし、なぜ彼は省略とも言える手法をとったのか、という疑問が残る。先ず考えられるのは、バラッドの特徴の一つ“narrative lacuna”²⁰を応用したのではないだろうか。この用法については、前述の拙論で言及したが、「歌う者、聴く者」が共に想像力を働かせて一つの歌なり作品を楽しむ手法である。従って既知の歌であれば、その一部の記述だけで読者は場面描写に歌の内容を重ね合わせて作品をより深く鑑賞できるのである。もう一点は、ハーディの伝承歌へのノスタルジアである。忘れられ廃れゆく運命にあった“living ballad”やフォークソングであるとしても、その一部をストーリーの網目に織り込んで、それらが存続してきた証し・記録として作品内にタイトルだけでも留めておきたかった彼の故郷の音楽への愛着表明とも考えられる。

ハーディの多岐にわたる音楽的知識の豊富さと記憶力の確かさが、作品内の的確な位置に効果的に引用・挿入・叙述され、またバラッドの物語性と技法をも受容している *The Mayor* は、読者を遠い心の故郷に誘う世界を展開している。何世紀にもわたって人々を楽しませてきたものが何であれ、それを存続させることに価値があり、彼の場合、古代王国 Wessex²¹を舞台にし

た「バラッド的世界」を描くことに重点が置かれていた。これが彼の作風が他作家とは異なる評価をされる理由の一つでもある。

注

1. *The Life of Thomas Hardy* は、ハーディの二度目の妻 Florence Emily Hardy が著者となっているが、実際はハーディが執筆したとされている。
2. 近藤和子、「ハーディとバラッドの伝統— *The Mayor of Casterbridge* 考察 (1) —」、*Asphodel* (50)、同志社女子大学英語英文学会、2015、24-49.
3. 作品内で引用・挿入されている歌の歌詞を調べるために、インターネットの情報データ・ベースとテキスト (Hardy, Thomas. *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge*. London: Macmillan, 1966.) の注を利用・参照した。タイトル名が記されている歌の①、②、④、⑤、⑧はそのタイトルを、③は1行目を検索ボックスに入れる。⑥、⑦、⑨、⑫、⑬は、この注で後述する。必要に応じて個々のサイトから順にリンクをクリックすると、次のようなサイトに行きつき、さらに詳細なドキュメントが得られるが、本稿の主旨に不必要な説明は割愛した。Vaughan Williams Memorial Library's Archive, Traditional and other Scottish Songs, National Library of Scotland, The Project Gutenberg eBook of the *Complete Works of Robert Burns*, The Traditional Tune Archive, *Reliques of Ancient English Poetry* など。なお、⑧の“Miss Macleod of Ayr”の資料は同志社女子大学図書館員に集めて頂いた。
4. 長い年月をかけて歌い継がれてきた伝承バラッドに対する新しいタイプのバラッドを指す。15世紀後半の印刷術の発達により、“broadsheet” (ブロードシート) と呼ばれる大判紙に俗謡や社会的事件などが片面に印刷され、路上で歌われたり売られたりした。この印刷された大判紙の名前から、この種のバラッドは「ブロードサイド・バラッド」と呼ばれるが、伝承バラッドに比べて粗雑な内容のことが多い。
5. Cf. Percy, Thomas ed., *Reliques of Ancient English Poetry*, Vol. I. New York: Dover, 1966, lxxii.
6. Cf. *The Mayor of Casterbridge*, edited with an introduction and notes by Vivian de Sola Pinto, 387.
7. 2014年度のNHKの朝の連続ドラマ『マッサン』の中で、しばしば歌われた曲なので、日本でも広く知られるようになった。歌詞もメロディもその系譜は複雑に絡み合い、研究者の間でも見解の相違が見られる。現在、普及している旋律は、『スコットランド音楽博物館』第4巻 (1792-93) の中の“O Can Ye Labor Lea,

Young Man”「お兄さん、畑を耕してちょうだい」に使われていたものである。この曲には判明しているだけでもドイツ語、フィンランド語、ポーランド語など15ヶ国の言語の替え歌が作られて現在に至っている。今日の日本では、卒業式や閉店時の音楽として知られているが、別れの際に歌われることがあっても、原詩は決して別れそのものがテーマではない。Cf.『蛍の光のすべて（改訂版）』、キングレコード、2014。

8. *The Mayor of Casterbridge* の注 (p.388) に、この歌は Robert Burns の “Bonnie Peg” (Oxford ed. of Burn’s *Poetical Works*, p.473) である、と解説されている。
9. *The Mayor of Casterbridge* の注 (p.390) に⑦の引用について解説されている。
10. 本稿の「はじめに」で言及している。
11. Cf. *Blue Guide Scotland*, 198.
12. *The Mayor of Casterbridge* の注 (p.393) に、この歌は “The Lass of Gowrie” である、と解説されている。
13. 作品内での引用は、「詩篇」10節から15節となっているが、正しくは9節から16節である。従って、Henchard は9節から16節を読む。
14. Lucetta の文言のみからこの歌を探し出すのは困難かと思われたが、“high-heeled shoon”、“siller tags”、“the one-and-forty wooers” の3語句を同時に検索ボックスに入れて調べると、“Tibbie Fowler o’ the Glen” であることが判明した。
15. Cf. *The Mayor of Casterbridge*, 395. Handel, George Frederick (1685-1759) のオペラ *Tamerlano* は、1724年に London で初演された。Weber, Carl J. は、ハーディが18世紀のオペラにも通じていたことに驚いた、と記している。
16. “Auld Lang Syne” の第4節1－2行。
17. “Skimmington ride” とも呼ばれ、女房を寝とられた夫、不貞の妻（夫）を虐待する夫（妻）など社会的道德の造反者の人形を作って馬に乗せて囃したてる嘲笑行列のことで、イングランドの田舎町では実際に行われていた風習である。「これは17世紀の初めころに悪魔払いの一つとして発生したらしい。1882年に罰金または投獄刑が発令されたが止むことはなく、1917年には警官が行列を解散させた記録がある。」(Chew 113)
18. 小鳥はこの世に生を受けて以来、永々と歌い続けているが、その代表としてハーディは “a weak bird”、“a swallow”、“a goldfinch” を *The Mayor* の中に登場させて、詩的效果を高めている。幼少の頃、父親が何気なく投げた小石が小鳥に当たって死んだ時の光景は、後々まで彼の脳裏に焼き付いていた。(Hardy, Evelyn 15) 彼の2編の詩、“Darkling Thrush” (119) と “Blinded Bird” (375) (括弧内の数字は James Gibson によるハーディの詩集の通し番号) は、*The*

*Mayor*の中の小鳥のイメージと重なり合う内容となっている。

19. 前述の拙論で引用しているの、ここでの重複は避ける。
20. バラッドの文体上の大きな特色の一つとして、語られる物語が極めて断片的で飛躍が多いことがある。今日、普通の物語の手順に慣れている読者には、まるでテクニストに“lacuna”(脱落)があるのではないかと思われる。バラッドは「省略の物語」であり、その省略された部分にバラッドの歌い手・聴き手ともに最大限の想像力を発揮して楽しむ余地が生まれる。(山中 51)
21. ウェセックス王国。イングランド南西部にあった Saxon の古王国のこと。ウェセックス地方は、ほぼ昔の Wessex に当たる。現在の Dorsetshire およびその周辺地方で、ハーディの Wessex Novels はこの地方を舞台にして描かれている。

引用文献

- Brooks, Jean R. *Thomas Hardy: Poetic Structure*. London: Elk, 1971.
- Burns, Robert. *Poems and Songs*. New York: Oxford, 1971.
- Chew, Samuel C. *Thomas Hardy*. New York: Russell & Russell, 1921.
- Dole, Nathan Haskell. *Selected Poems of Robert Burns*. New York: Thomas Y. Crowell & Co. Publishers, 1892.
- Elsbeth and Michael Wills. *Blue Guide Scotland*. London: A & Black, 2001.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928*. New York: St. Martin's Press, 1965.
- Hardy, Thomas. *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge*. London: Macmillan, 1966. (1st ed. 1886)
- Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry*, Vol.I. New York: Dover, 1966. (1st ed. 1886)
- Spurgeon, C. H. (Charles Haddon), 1834-1892. *Bible. O. T. Psalms*, New York: Funk & Wagnalls, 1887.
- 山中光義、『バラッド詩学』、東京：音羽書房鶴見書店、2009.

参考文献

- Asquith, Mark. *Thomas Hardy, Metaphysics and Music*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005.
- Brandy and Tate. *A New Version of the Psalms of David*. London: Longman, 1821.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy* (2nd ed.). London: Longman, 1961.

- Firor, Ruth A. *Folkways in Thomas Hardy*. New York: Russell & Russell, 1968.
- Friedman, Albert B. *The Ballad Revival*. Chicago: Chicago UP, 1961.
- Gerould, Gordon H. *The Ballad of Tradition*. New York: Oxford UP, 1974.
- Hardy, Evelyn. *Thomas Hardy: A Critical Biography*. New York: Russell & Russell, 1954.
- Laws Jr, G. Malcolm. *The British Literary Ballad*. London and Amsterdam: Southern Illinois UP, 1972.
- The Scottish National Dictionary Association Ltd. *Concise Scots Dictionary*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1985.
- バラッド研究会編訳、『全訳 チャイルド・バラッド』全3巻、東京：音羽書房鶴見書店、2005-6.
- 藤井 繁訳、『キャスターブリッジの市長』、東京：(株) 千城、1980.
- 日本聖書協会、『聖書』、東京：日本聖書協会、2000.